

## Stephen Crane における神について

伏 見 茂

(帯広畜産大学米文学究研室)

1980年8月30日受理

### On God in Stephen Crane

Shigeru FUSHIMI

#### 1

It is clear that Crane has two general and opposing perspectives on nature—and, therefore, on God. For his fiction represents his full intellectual, emotional, and imaginative involvement with both the glow and the gloom of the elements, which seem always to be symbols of divine will<sup>1)</sup>.

Stephen Crane の小説なり詩を読むと、自然つまり神に対して相反する2つのパースペクティブが見られるのは事実であり、ここでは小説について述べているのであるが、それが詩においても、自然なり神の中に、Robert Ryan の言う「光」と「影」の両面が見られる。作者 Crane が自然つまり神の真実を語る時の相を、Ryan は“romanticism”と“anti-romanticism”というカテゴリーで説明しようとする。これは Crane のこの問題に対する捉え方に一貫性がないことを示すものであり、それだけに彼の内的世界が、相矛盾し合い葛藤に苦悩するそれであったことを物語るものである。Hamlin Garland によれば<sup>2)</sup>、Crane の精神構造は一般の人より遙かに潜在意識的であった点を指摘しているところをみると、彼の内的世界は、広い経験的な海原を孤独に彷徨する旅人のそれであることが知られるし、その心的傾向は、暗い闇の世界への飽くことを知らない没入のそれであることが伺われる。確かに、彼の宇宙観には、同一のテーマを取り上げて、首尾一貫した概念を見ることは難かしいし、その時の彼の心理的内的世界の状況に応じて、変化が見られるという風に受け取られるのはどういう訳であろうか。彼の小説や詩の中には彼の宇宙観が随所に見られ、特に神の存在の「光」と「影」の部分が繰り返し言及されているが、これは彼の複雑な性向から生じているのは確かであろう。

Crane cannot be called irreligious. Like Tennyson...and others, he was worried and upset about religion, and—caught up in the current of his times—he became an agnostic<sup>3)</sup>.

彼は早くから宗教上の儀式の洗礼を受けて育ったことが知られているが、こうした宗教上の経験を経てこそ、結果的にはそれに対する懐疑を生み出し、非宗教的であると言うよりは、

「不可知論者」に移行して行く過程の中で、作品が生み出されていったところに、相矛盾した結果が生まれる原因があったのだろう。

Willis Clarke に宛てた書簡の中で、Crane は次のように書いている。

「私は子供の頃、教会や祈とう会が好きであったが、このような熱意は13歳頃にさめてしまった」。その時兄の Will が、彼に「地獄を信じないように」<sup>4)</sup>と言ったという。

彼と宗教の関係については、Daniel Hoffman がその書 *The Poetry of Stephen Crane* の中で克明に論じている。この中で、Amy Lowell によれば、Crane は宗教的なバックグラウンドに取りつかれていることが分かるし、「彼は宗教を信じないし、それに悩んでいる。しかしそれから自由ではあり得なかった。Crane の魂は苦悩にさいなまれ、彼を裏切ってきた生活理論の中で、この苦悩をはねのけた」<sup>5)</sup>というのである。

このように彼の内的世界は、幼い頃からの宗教上の経験によって培われてきたもので、それが複雑であるためには、彼本来の気質と彼の両親の宗教の相反する理念の影響があったことは確かである。

一般に言われていることだが、彼の父はメソジスト派の厳格な牧師であり、一方母は著名なメソジスト派の牧師 Reverend George Peck の娘であった点、両者ともその宗教上の生活において指導的立場にあった人達であった。しかしこの両者の宗教理念の間に自ずと相違が見られるために、Stephen の彼等から受けた影響と反応も、自ずと違ったものになったと考えられる。

John Berryman によれば<sup>6)</sup>、「Craneの母は父より明らかに偏狭であり」、一方父の方は、「聖者のような生活を送った」と結論している。しかし *Dictionary of American Biography* の中では、これとは違った見解が見られるという。「彼の父は理論的には古い型の厳格なメソジストであり、神には罪から救済してくれる愛があるという感覚を持っていた。そして彼は紳士的であり、彼の判断には慈悲深いところがあった。彼は独善的教義と偏狭な教育に馴らされた異常な程崇高な精神の持主という印象を残している」<sup>7)</sup>。

ここで重要なことは、彼の父は「神には罪から救済してくれる愛」があると信じていたことであり、従って「その判断には慈悲深いところがあった」ことである。このような父からの影響によって、Stephen 自身父のことを、「非常に単純で善良な人であったので、人間のことは何一つ知っていない程である」<sup>8)</sup>と考えている。父は「慈悲深く」、「単純で」あったが故に、彼は父の魂から多くを負っていると思われるし、父は人間の罪悪について殆んど何も知らなかったであろうが故に、かえて父の神の慈悲深さに、彼自身惹きつけられたであろうことは想像に難くない。

加えて罪について考えてみると、Wesley の“Sermon on Sin in Believers”の一節を解釈して、父は次のように考えているという。

「信仰者にとって、罪という言葉の中には犯罪行為という意味はないし、非難されるようないかなる精神的働きの意味もない。従って罪という言葉は、誘惑を意味する」と言うのである。そして続けて、「人間的であるということは、慾望と情慾を持っていることである。しかし道理が分からないので、知性と良心に導かれる必要があるし、意志の力によって抑制される必要がある。……人間の義務と安全から考えると慾望と情慾は静められ、抑えられなければならない。完全な人間性にとって、清浄であるばかりでなく重要である愛情が必要である」<sup>9)</sup>。

父の罪意識によると、この地上で誘惑が知性と良心に導かれるならば、それは存在し得なくなることを示唆しており、この地上という生活空間の中で、神の愛によって罪への誘惑から救われるのである。ここでは、この地上には飽くまでも神の愛が根底にあり、その上にたった現実世界での救いが可能である。

一方彼の母が偏狭であるためには、彼女は厳格な George Peck の娘であったことに帰因するであろう。事実 Peck は宗教に関する小冊子を書いており、この宗教規範に基づいて彼女を教育したという。

Hoffman によれば<sup>10)</sup>、George Peck は1816年説教師のライセンスを取得し、Timothy Dewy 神父の“Prepare to meet thy God”という説教を聞いたという。これによると、「罪人よ、お前は嵐を通して地獄に入る覚悟があるか。お前はなめ尽す劫火と共に住むことが出来るか。永遠に燃える中で耐えることが出来るか。お前の骨は、火の海に真逆様に飛び込めるような鉄か、お前の肉は真喩か」というような説教であったという。

これを聞くと、神の愛や慈悲による救済は全く見られず、ここには、この地上における罪への強烈な弾劾が見られるだけである。罪の行為に対する救いは考えられないのは、人間は神の無慈悲な絶対的な力の前では非力であるために、神の支配する地獄で象徴される劫火に巻き込まれるしかないからである。この思想のもつ基本的精神は、罪人はこの地上では救われることがないばかりか、神の断罪に直面するしかないということである。罪人に対する飽くことのない叱責は、当時の宗教の特徴であったろうし、このような世界で育った彼の母も、当然のことに「より偏狭な」人間として形造られた。これに加えて、母の祖父も叔父もメソジスト派の厳格な宗教規範を忠実に守った人達であったことを知れば、彼女の育った家庭環境から考えると、彼女の Stephen に対する母親としての規制は当然の結果であった。

このように、彼の両親における神と罪に関する意識の間に、同じメソジストでありながら非常に相違がみられる。前者の神は慈悲深い存在であり、後者の神は冷酷な絶対的な存在であった。つまり前者は、この地上における罪人は神の愛なり慈悲によって救われるけれども、後者は、その愛によって罪人を説得するのではなく、地獄の劫火の比喻を通して罪人を弾劾するのである。

Stephen の内的世界では、父の神と母の神とが葛藤を繰り返していたために、これが彼の

小説や詩の中に、抜き差しならぬ情況となって登場してきても不思議ではない。Marcus Cunliffe は“American Quaterly, VII”の中で次のようなことを言っているという。

「彼は聖職者の家に生まれたけれども、聖職には反抗していた。彼の初期の作品の中で、彼がどの立場に立っているかを知っていたとは思われない。……………彼は偽善的に見える世界の見馴れた生活に反抗するが、しかしこの要素が彼の思想を形成しているのである」<sup>11)</sup>。

従って彼が反抗するものは、家庭の厳格な教育であるとか、神の恐ろしさばかりでなく、彼が教えられてきた宗教規範のもつ偽善性でもあったと言える。

ここで最初に戻ろう。私は、Crane の作品には「光」と「影」が見られるという Ryan の言葉を引用した。これは明らかに彼の両親の相反する宗教理念によって培われてきた、いわば彼の神に対する終局的な認識であった。

では彼の神に対する認識の中で、この「光」と「影」とは具体的にいかなるものか、彼の代表作 *The Red Badge of Courage* と詩篇 *The Black Riders* と *War is Kind* の中に、それらを探ってみよう。

## 2

Crane の宗教観は、彼の両親のもつ相反する宗教理念の衝突から生まれていることを見た。これは取りも直さず、彼の文学の主要なテーマとなっている神に対する認識に、ここではそれを包括する自然とみたいのだが、非一貫性をもたらしたと思われる。しかし彼の自然に対する認識の仕方に一貫性が認められないために、それだけに自然に対する見方が、彼の経験してきた宗教と深く関っていたであろうことに注目せざるを得ないし、この自然の中に、彼自身の内的な神とメソジストで代表される外的な神の存在を見逃す訳にはいかない。Ryan も「Crane は子供の頃反対した公式的な宗教の代わりに、自然の宗教を置き換えた」と推測出来る<sup>12)</sup>と言っているように、彼自身の内的な神が、自然との関わりを持たせたと考えることが出来る。

The livid lightnings flashed in the clouds;  
The leaden thunders crashed.  
A worshipper raised his arm.  
“Hearken! Hearken! The voice of God!”  
“Not so,” said a man.  
“The voice of God whispers in the heart  
So softly  
That the soul pauses,  
Making no noise

And strives for these melodies,  
Distant, sighing, like faintest breath,  
And all the being is still to hear."<sup>13)</sup>

ここでは、キリスト教徒、つまり「崇拜者」の神と、「一人の男」、つまり公式的な宗教に拘束されない人間の神との間に、明確な相違が見られるのは興味深い。「崇拜者」は「雷の音」を神の声と捉えるのは、原罪を背負ったと認識する人間にとっては、それが叱責としての恐ろしい声に聞えるからであり、一方「一人の男」にとって神の声は、「魂が休めるように静か」なのであり、「かすかな息使いにも似た溜息のような旋律」として響くのである。そしてこの声が「誰の耳にも聞える」というのは、彼のような公式的な宗教に拘束されない人間自身の内的な神の声として受け取ることが出来る。Crane の自然哲学からすれば、本来自然は静かでやさしいものという公式が生まれてくる場合もあり、生まれてこない場合もあることを知れば、これは自然のやさしい一面を、既成の宗教との対比において強調したものだだろう。

では自然のもつやさしさの意味を、*The Red Badge of Courage* の中に探ってみよう。

5章では、死体が手足を投げだしており、顔一面に血をしたたかせた兵士がうめき、砲弾で膝の関節を砕かれた兵士が木を楯に立っていたりするすさまじい戦場の中で、若者は絶望的にこの光景を見ている。足元には無気味な形をしたものが動かざるところがっており、死者達は高い所から落ち込んで来たような格好で、地面に投げ出されている。このような光景の中で、我に返った若者はこの凄惨な人間の営みと自然の営みを比較する。

As he gazed around him the youth felt a flash of astonishment at the blue, pure sky and the sun gleaming on the trees and fields. It was surprising that Nature had gone tranquilly on with her golden process in the mids of so much devilment!<sup>14)</sup>

Crane は人間がどのような苦境に落ち入っても、それを取り囲む自然との関りを忘れない。むしろ苦境に落ち入れれば落ち入る程、人間と自然との関わりを強調せざるを得なかったのは、ある意味では、自然は人間の取るに足りない営みを、「金色の軌跡」を描いて静かに見つめているからであり、「金色」で象徴されるように、自然に何かトランセンデンタルな神の存在を認めているからであろう。

7章では、若者は前戦から逃亡するのだが、彼の逃亡の正当化は、「自分の命を守るために立派に立ちまわったのだ」<sup>15)</sup>。しかし戦友のことや戦闘について考える時、彼には動物的な反逆心が湧き起るのであり、反面苦悩と絶望が渦巻くのは、罪と罰の深さに対する反射的な反応からであろう。こんな気持で森の中に入り込む若者は、平和な森をかき乱すことになり、かき乱された草木は彼に憎しみを憶えているようである。このことは、平和な森に対する聖なる領域意識が Crane の根底にあることを示している。

Off was the rumble of death. It seemed now that Nature had no ears. This

landscape gave him assurance. A fair field holding life. It was the religion of peace. It would die if its timid eyes were compelled to see blood. He conceived Nature to be a woman with a deep aversion to tragedy<sup>16</sup>).

若者の自然とは、生命を保持した平和な宗教であった。そして自然は血を見るのを嫌っているという感覚は、彼の逃亡の正当化を計ろうとする安易な妥協のように見えるけれども、しかし作者の中に、自然には人間に対する慈愛が包摂されているのだという概念が基本的にあったことを示している。これに続く文章も、表面的には若者の逃亡行為の正当化に役立つものであるけれども、自然に対する作者の理解の仕方には、若者の行為そのもの以上に自然に対する深い洞察が見られ、それが人間と関わる時、深遠な宗教上の啓示を与えてくれることを示している。

He threw a pine cone at a jovial squirrel, and he ran with chattering fear. High in a treetop he stopped, and, poking his head cautiously from behind a branch, looked down with an air of trepidation.

The youth felt triumphant at this exhibition. There was the law, he said. Nature had given him a sign. The squirrel, immediately upon recognizing danger, had taken to his legs without ado. He did not stand stolidly baring his furry belly to the missile, and die with an upward glance at the sympathetic heavens. On the contrary, he had fled as fast as his legs could carry him; and he was but an ordinary squirrel, too doubtless no philosopher of his race. The youth wended, feeling that Nature was of his mind. She re-enforced his argument with proofs that lived where the sun shone<sup>17</sup>).

ある意味では、この文章は若者の逃亡の正当化と単純に解されても仕方ないが、しかしよく読んでみると、彼の逃亡行為と1匹のリスの行為との類似性によって、生けるものすべては自然の法則に従って生きていることを自覚するところは、若者の自然に対する開眼の儀式でもあった訳である。そして彼は、「自然が自己の一部になった」と感ずるのは、皮相的な逃亡行為から自然の意味を理解するに至った彼自身の人間的な成長過程の重要なモメントと解される。確かに、彼は自然の平和な法則を乱す戦闘に従事してきた。自然の中でのこのような行為は、彼の以上のような認識からすれば、当然反自然的な行為であった訳であるから、リスの行為によって彼の行為を正当化するという安易な解釈だけでは、この場面の真の意味を見落す危険性がある。

だからむしろこの場面では、お互い殺し合っている人間達の行為は、当然反自然的であるという認識に立てば、このように人間が交戦する限り、人間は必ず宇宙的な調和から自らを遮断してしまう結果になるということではないだろうか。即ち彼が一時的にも戦闘との関係を絶ったということは、他の兵士達の眼から見れば、それは卑劣な行為として呪われても仕方ない

が、彼の立場に立てば、彼は自己と自然が一体であることを認識した点、より重要なのである。自己と自然との一体感によって、彼の気持は救われる。確かに、この場合自然は平和であり、彼に安息を与えてくれた。

The youth went again into the deep thickets. The brushed branches made a noise that drowned the sounds of cannon. He walked on, going from obscurity into promises of a greater obscurity.

At length he reached a place where the high, arching boughs made a chapel. He softly pushed the green doors aside and entered. Pine needles were a gentle brown carpet. There was a religious half light<sup>18)</sup>.

この平和な聖域と感じられる場面と砲声との対比は、人間と自然との関わり、つまり人間の反自然的な行為を示唆したものであるが、しかし更に奥まった所に入っていくと、ここの自然は平和な神々しい礼拝堂であってみれば、自然は彼の血腥い戦闘の傷手から救ってくれる慈悲深い神の存在なのである。従って彼の精神的な苦悩を救ってくれるのは、自然の神々しさであった。

この後彼は、「この高いアーチ型をした枝が礼拝堂の形をしている場所」に死者を見るのであるが、死者に見つめられる彼は悲鳴をあげ、しばし化石のように硬直する。またしてもここに礼拝堂と死者の対比が見られ、自然と反自然の対立的な概念が見られても、「ささやかな守護堂はわびしく静まりかえっていた」。自然と死者との関わりは、*The Black Riders* の中にも見られる。

The ocean said to me once:  
 "Look!  
 Yonder on the shore  
 Is a woman, weeping.  
 I have watched her.  
 Go you and tell her this,—  
 Her lover I have laid  
 In cool green hall.  
 There is wealth of golden sand  
 And pillars, coral-red;  
 Two white fish stand guard at his bier.  
 "Tell her this  
 And more,—

That the king of the seas  
Weeps too, old, helpless man.  
The bustling fates  
Heap his hands with corpses  
Until he stands like a child  
With surplus of toys."<sup>10</sup>

この場合の自然は海である。泣いている婦人の恋人は死んだが、海はこの恋人をやさしく「涼しい緑なる広間」に横たえて、2匹の白い魚に彼の棺台の守をさせている。海という自然と無力な人間との対比において、人間の反自然的な無謀さに対しても、自然はやさしく見守っているというのが、この詩の意味である。

確かに、自然は「あり余る程の玩具」でもあるかのような人間の死体を手に積み重ね、子供のような純心無垢な姿で立っているのは、前の「守護堂がわびしげに静まり返っている」姿と一致する。ここにも自然の慈愛が感じられる。

*The Red Badge of Courage* の最終章で、若者は今までの流血と怒りの戦場から戻り、苛酷な試練を経て、静かな安らぎの世界に戻ろうとしており、あの残酷な試練などは何処にも存在しなかったようだとする心理的な推移が見られるが、この心の安らぎは、自然への回帰によって達成されている。彼の今迄の息づまるような悪夢、戦争の灼熱と苦痛は、他の兵士から見れば、毒舌と杖で出来ているこの世の所詮通らなければならない運命であったけれども、若者は過去の経験的な世界が自分のための世界だと信じた。彼のこのような諦観は、人間と人間の戦闘からばかりではなく、自然と人間の関わりからも生まれたものなのである。

He turned with a lover's thirst to images of tranquil skies, fresh meadows, cool brooks—an existence of soft and eternal peace.

Over the river a golden ray of sun came through the hosts of leaden rain clouds<sup>20</sup>.

若者における自然は永遠に平和であることを知れば、彼が苦境を通り抜けて、心の平和を回復出来たのは、取りも直さず、自然のもつ平和と慈愛によってであった。

## 3

神における「光」の部分を見た後では、その「影」の部分を見なければならない。Craneにとって神の「光」の部分は、自然、つまり神のもつ慈愛を意味したが、むしろ基本的には、彼にとって自然は「影」、つまり恐ろしいもの、征服出来ないものとする認識が強いために、*The Open Boat* におけるように、彼にはそれに挑戦し否定しなければならない場合が多く見られる。

ここでは、自然を宇宙、つまり神と考えて考察を進めようと思うが、彼の根底には、幼い



頃からの公式的な神が存在し、この神には彼の両親の相反する宗教理念の葛藤が渦巻いていたことは、前に述べた。

確かに、彼は母の宗教観に強く反抗した形跡が見られ、*George's Mother* の中で、George が酒をのむことによって母を困らせ、母の厳格な宗教上の訓練に反抗しているように、Stephen 自身も 14 歳の時、酒をのむことによって意識的に母の宗教に不信を表明している。

一方父の宗教は彼から支持されていたような印象を受けるが、これは実は父が彼の 10 歳の時に死んだことに帰因するのではなからうか。確かに彼から見れば、父は「聖者のような生活を送った」し、彼の神には「罪から救済してくれるような慈悲がある」と感じさせたけれども、このような好意的な捉え方は、むしろ母の宗教理念との比較において、部分的には若くして死んだ父に対する愛着と受け取れないだろうか。彼の宗教そのものに対する感じ方の中には、確かに父の宗教が根底に息づいていたと考えられるが、母から受けた厳格な宗教によって、これが相殺されてしまったような印象さえ憶えるのである。

前に見た神の「罪から救ってくれる慈愛」という見方から、彼の作品の中に、神の慈愛の感じられる部分のあるのを見てきたが、やはり彼の作品の中に占めるこのような概念は、極く一部に過ぎないことを断っておかなければならない。10 年という短かな期間に受けた父からの影響がある程度は残っていたために、前に見たような自然に対する感じ方も、当然のこととして容認出来たが、これにも増して、彼が 20 歳まで母の宗教から自由ではあり得なかったことを考えると、宗教について言えば、やはり「より偏狭な」母の影響が色濃く影を落していたとする見の方が正しいであろう。

彼の詩を読むと一層その感を深めるのであり、神の慈愛なるテーマは極く限られており、殆んど詩は、神不信に徹しているのである。面白いことに、いくつかの詩の中では、聖職者としての父に対して反抗的な罵声を浴びせているのは、母の宗教に対していかに不信を抱いていたか物語るものであり、母の宗教に対する不信が、父の光の宗教を巻き添いにしてしまったという印象を受ける。

You say you are holy,  
And that  
Because I have not seen you sin.  
Aye, but there are those  
Who see you sin, my friend<sup>21)</sup>.

「あなたは神聖だと言う」のあなたは、George Peck で代表される一般のキリスト教の聖職者と受け取れるが、彼の身近かな聖職者を考えると、これは彼の父であると私は考えたい。

何故なら、父の愛なり、内面の声と光の宗教を考えると、Crane の立場に立てば、「私はあなたに罪を見たことがなかったから」、あなたは神聖であると考えても不思議ではない。し

かし「あなたに罪を見る人達がいる」と言うのは、父に対する批判を婉曲に表明したものと受け取れる。

次の詩は、聖職者、つまり父と罪の関係を述べたものであろう。

With eye and with gesture  
 You say you are holy.  
 I say you lie;  
 For I did see you  
 Draw away your coats  
 From the sin upon the hands  
 Of a little child.  
 Liar!<sup>22)</sup>

聖なるはずのあなたが嘘つきであるのは、「あなたの法衣で罪をかくし、子供の手を握るのを見たから」である。この場合のあなたと子供の関係は、父と Stephen の関係と置き換えて読むと、一層意味がはっきりする。

そして別の詩 (*The Black Riders* No. 63) の中で、司祭が誇らしげに振舞っているのを、ある者が畏縮して眺めているのは、教会の伝統的な抑圧に脅えている姿であるからである。これは彼の父が偽善という仮面をつけて、いつも高い所にいるのを見る時に見られる信者の姿であることを知れば、このような見方は、誠実であるはずの父に対する信じ難い幻想が、彼の心の中に渦巻いていることを意味しないだろうか。

では、彼の宗教観の根底にある聖書や教会を、彼はどのように考えているか探してみたい。

*War is Kind* 中の2つの詩は、キリスト教の象徴としての聖書と教会について、彼はいかにアナキーであったかを示すものであり、Hoffman も言っているように、これは、「父の死後、Stephen Crane は多分神の声の聞かれる教会には二度と行かなかったろう」<sup>23)</sup>という言葉によって証明されるだろう。

父の死は、母の宗教理念との比較において、Stephen には重大な転機となったことは想像に難くないのであり、その後の彼の宗教との関わりの中で、まず聖書と教会が挑戦の対象とならざるを得なかった。

A little ink more or less!  
 It surely can't matter?  
 Even the sky and the opulent sea,  
 The plains and the hills, aloof,  
 Here the uproar of all these books.

But it is only a little ink more or less<sup>24)</sup>.

この中の本とは、明らかに彼の育った家庭における宗教に関する書物、つまり聖書を意味しており、彼流に言えば、それは「意味のない単なるインクのしみ」に過ぎない。それは人間にとって、「意味のない単なるインクのしみ」であるばかりでなく、自然にとっても、「騒々しい叫び声」に過ぎないし、無関係なたわ言に過ぎない。そして同じ詩の中で、次のような言葉が続く。

What?

You define me God with these trinkets?

Can my misery meal on an ordered walking

Of surpliced numbskulls?

And a fanfare of lights?

Or even upon the measured pulpittings

Of the familiar false and true?

Is this God?

Where, then, is hell?

Show me some bastard mushroom

Sprung from a pollution of blood.

It is better.

Where is God?<sup>25)</sup>

「このつまらない聖書」を通して神を教えても、それによって彼のみじめな心の葛藤が救われないのは、世に言う神父は、「白い法衣をまとった愚者」であり、説く説教は、「大ぼら」に過ぎないからである。彼の場合、このような状況の中には神などは存在しないのだから、寧ろ純血を汚した忌々しい成り上り者を摘発してくれた方が有難いのである。一体神は何処にいるのか。

You tell me this is God?

I tell you this is a printed list,

A burning candle and an ass<sup>26)</sup>.

神などは何処にもいないのであり、彼にとって、聖書なるもの「印刷された目録、燃えているろうそく、そして愚者」に過ぎない。

また他の詩 (*The Black Riders*, No. 68) の中で、1人の精霊が夜の沈黙を通り抜けて、「神」と叫ぶが、神は彼をあざ笑うだけであり、彼はこの神の拒絶に狂って、「神はいない」と絶叫する。この時、空から一本の剣が彼を襲い、彼は絶命する。これは Crane の内的な世界

の葛藤をよく表現している。

では次に、彼は教会についてどのように考えているのであろうか。

Two or three angels  
 Came near to the earth.  
 They saw a fat church.  
 Little black streams of people  
 Came and went in continually.  
 And the angels were puzzled  
 To know why the people went thus,  
 And why they stayed so long within<sup>27)</sup>.

2, 3人の天使が地上に降り立って、「肥満した教会」を見る時の「肥満」は、明かに教会が偽善的な伝統によって肥え太ったことを揶揄したものであろう。「伝統」に関する詩 (*The Black Riders*, No. 45) の中で、お前は赤子を喜ばせるミルクであって、大人の糧を持たないと言いながら、この世の大人達は皆赤子であると断定する。

Crane 自身の神とおぼしき天使が、この教会に出入りする他の赤子達に当惑するのは、教会には、如何に他人から押し売りされた神の信者で溢れているかを物語っている。従って教会は肥えているのだらう。

この中の天使は、Crane 自身の神と思われると述べたが、*The Black Riders* の中の次の詩 (No. 34) を読めば明らかであろう。この中で、沢山の奇妙な行商人がやって来て、私に小さな像を差し出し、「これは私の神です。そして今はこれが私の好きな神です」と言うが、「私はあなたのような神、あなたにとって好きなつまらない神など買う訳にはいかない」と言うのである。

人から押し売りされる神に嫌悪を示しているところから、上の詩は、天使の姿を借りて、自己の内的な神に、教会に対する当惑を語らせていると理解される。

では、聖書と教会に対するこのような基本的な概念から生ずる神とは、彼にとって如何なる意味を持つものだろうか。

A god in wrath  
 Was beating a man;  
 He cuffed him loudly  
 With thunderous blows  
 That rang and rolled over the earth.  
 All people came running.  
 The man screamed and struggled,

And bit madly at the feet of the god.

The people cried:

“Ah what a wicked man!”

And—

“Ah, what a redoubtable god!”<sup>23)</sup>

George Peck 的な宗教観からすれば、人間は墮落した罪人の過程を求めるならば、地獄の劫火にさいなまれるだけである。Stephen の母の眼には、その子供達はすべて墮落して、遂には破滅の道を突き進むとしか映らなかったであろう。従って、永遠の破滅から彼等を救うためには、彼女は断固たる態度で彼等の破滅を阻止しなければならなかった。これが彼女の基本的な宗教理念であったとすれば、「怒り狂った神が、一人の男を殴っても」当然のことであった。「地球上に響きわたるような音をたてて彼を打った」のは、Stephen の少年時代の母の宗教教育を根底におけば、彼の側から母の宗教上の偏狭性を擲揶したものだろう。しかし「何と悪い男だ」という声を聞くと、どうも Stephen には救いはなさそうであるが、最後に、「何と恐るべき神だ」という声を聞くと、彼自身の内的な神に勝利の女神が微笑むと言うものだろう。この詩は、前者と後者のいずれに比重を置いて読むべきだろうか。彼の内的世界には、いずれの側の規範も共存していたと考えられるが、この詩は残酷な神の告発の詩だと考えられるから、寧ろ後者に力点を置いて読むのが正しくはないか。

Blustering god,  
Stamping across the sky  
With loud swagger,  
I fear you not.  
No, though from your highest heaven  
You plunge your spear at my heart,  
I fear you not.  
No, not if the blow  
Is as the lightning blasting a tree,  
I fear you not, puffing braggart<sup>24)</sup>.

「威張り散らす神」の槍が、「木を貫らぬく稲妻の如きもの」であり、「私の心臓を突き刺す」ものであることを知れば、彼の内的世界における異質の神同志の葛藤が、如何に危機的情況にあったか理解出来る。この葛藤の中で、「お前を恐れはしない」と繰り返す彼の心的情況は、悲痛とも受けとれる。

続く詩の中で、「如何にお前が私の心を見すかすことが出来ても、恐れはしない」のであり、だから神が血腥い槍で脅すようなことがあれば、逆に彼の挑戦にあって、罵声を聞くこと

になるのである。ここには、*The Open Boat* に見られるように、神は彼の冒瀆の対象ではない。

そして次の詩を読めば、彼の考える公式的な神の本質が、冷静な眼で捉えられているのが伺われる。

A man adrift on a slim spar  
 A horizon smaller than the rim of a bottle  
 Tented waves rearing lashed dark points  
 The near whine of froth in circles.  
 God is cold.

The incessant raise and swing of the sea  
 And growl after growl of crest  
 The sinkings, green, seething, endless  
 The upheaval half-completed.  
 God is cold.

The seas are in the hollow of The Hand;  
 Oceans may be turned to a spray  
 Raining down through the stars  
 Because of a gesture of pity toward a babe.  
 Oceans may become grey ashes,  
 Die with a long moan and a roar  
 Amid the tumult of the fishes  
 And the cries of the ships,  
 Because The Hand beckons the mice.

A horizon smaller than a doomed assassin's cap,  
 Inky, surging tumults  
 A reeling, drunken sky and no sky  
 A pale hand sliding from a polished spar.  
 God is cold<sup>302</sup>.

上の詩は、*War is Kind* が出る前に書かれたが、彼はこれを出版しなかったと言われる。1929年 Crane の死後 *Bookman* 誌にのった後、1930年 *Collected Poems* に加えられたもの

である。

しかし Hoffmar によれば<sup>31)</sup>、この詩は彼の初期の宗教上の訓練というよりは、円熟期の経験を映し出していると言われるように、若い絶叫型の彼の姿が消えて、平然たる冷静な視点から神の本質を見抜いているといった風である。

よく使われる手法であるが、人間と海の対比において、無力な人間が狂暴な海の犠牲者となろうとする時、神は人間に対して全く無関心なのである。「細い丸材」につかまって漂流している人間と彼を取り巻く環境としての荒々しい海。海は絶え間なく立ち騒ぎ、海は神の御手のくぼみの中にあり、海の運命は神の御手に握られている。しかし海の運命は、「灰色の灰と化し」、そして「魚のざわめきと船の叫びの中で、永遠に嘆き喰り死ぬ」ことになる。

水平線も死ぬ運命にあり、この水平線に対する人間の解釈が、「死ぬ運命にある暗殺者の帽子より小さい」ことを知れば、人間は死ぬ運命にある暗殺者のように、神の救いから見放なされたということであろう。つまり「青白い手が、磨かれた丸材から滑り落ちる」ことによって、彼は確実に神の手から見放なされてしまう。「神は冷たい」が繰り返されるのは、「暗殺者」というアイロニカルな表現によって、「暗殺者」が死ぬ運命にあることと、人間を殺す者というイメージから、神の人間に対する不干渉性と冷酷さを強調しているものと理解される。ここには神に対する罵声も冒瀆的な言葉もないが、人間は神の愛を享受することなしに、確実に破滅していくということが、冷徹な眼でうたい上げられている。

#### 4

以上神に対する「光」の部分と「影」の部分、作品の中に見てきた。前者は神の人間に対する慈愛であり、後者は神の人間に対する無慈悲な冷酷さである。Stephen Crane の中には、こうした相矛盾する2つの概念が見られるのは、彼の幼い頃からの家庭における宗教教育に、その原因を求めることが出来ると述べた。従って、後者の神の人間に対する無慈悲な冷酷さは、両親の宗教観、つまり彼等の宗教に対する恐ろしさとその偽善性に対する挑戦という形で述べられていることが分るし、これとは対立的な概念、つまり神の愛も、彼等の宗教観に対する反撥から生まれていることが分るであろう。いずれにせよ、彼の宗教観は両親なしには存在し得なかった。

では、この2つの相矛盾する神は、彼の如何なる認識に基いて、彼の内的世界に位置しているのだろうか。

A man went before a strange god—,  
The god of many men, sadly wise.  
And the deity thundered loudly,  
Fat with rage, and puffing :

“Kneel, mortal, and cringe  
 And grovel and do homage  
 To my particularly sublime majesty”.

The man fled.

Then the man went to another god—,  
 The god of his inner thoughts.  
 And this one looked at him  
 With soft eyes  
 Lit with infinite comprehension,  
 And said: “My poor child!”<sup>382</sup>

「見知らぬ神、つまり悲しい程賢い多くの人達の崇拜する神」は、キリスト教の神であるから、「人間よ、跪いて顔をさげ、腹這いになって忠誠を誓え」と囁くこの神から逃げるのは、明らかに、彼の両親の神に対する挑戦であり、不信であると理解される。

しかしもう1つの神、つまり「内的思考の神」は、「理解に充ちたやさしい眼」で、「私の可愛想な子」と言って、人間の苦境に慈愛の眼をそそいでくれる。従って今まで見てきた Crane の相反する2つの神とは、キリスト教で代表される無慈悲で冷酷な偽善的な神と、この神との対決を通して体得した「内的思考の神」とであったと言える。

#### 注

- 1) Robert Ryan, *Literary Naturalism and Stephen Crane's Fiction* (Univ. Microfilms, 1976), p. 79.
- 2) R. W. Stallman & L. Gilkes (ed.), *Stephen Crane: Letters*, (New York Univ. Press, 1960), p.403.
- 3) Robert Ryan, *op. cit.*, p. 47.
- 4) R. W. Stallman & L. Gilkes, *op. cit.*, p. 242.
- 5) Daniel G. Hoffman, *Poetry of Stephen Crane* (Col. U. Press, 1971), p. 45.
- 6) John Berryman, *Stephen Crane* (Methuen, 1950), p. 8.
- 7) *Ibid.*, p. 48.
- 8) R. W. Stallman & L. Gilkes (ed.), *op. cit.*, p. 243.
- 9) Daniel G. Hoffman, *op. cit.*, pp. 49-50.
- 10) *Ibid.*, p. 57.
- 11) *Ibid.*, p. 46.
- 12) Robert Ryan, *op. cit.*, p. 46.
- 13) The Black Riders, No. 39 in *The Completed Poems of Stephen Crane*, (Cornell Univ. Press, 1972).
- 14) *The Red Badge of Courage* (The Modern Library, 1925), p. 73.
- 15) *Ibid.*, p. 87.
- 16) *Ibid.*, pp. 90-91.



- 17) *Ibid.*, p. 91.
- 18) *Ibid.*, p. 92.
- 19) *The Black Riders*, No. 38.
- 20) *The Red Badge of Courage*, pp. 266-267.
- 21) *The Black Riders* No. 50.
- 22) *Ibid.*, No. 57.
- 23) Daniel G. Hoffman, *op. cit.*, p. 77.
- 24) *War is Kind*, No. 79.
- 25) *Ibid.*, No. 79.
- 26) *Ibid.*, No. 85.
- 27) *The Black Riders*, No. 32.
- 28) *Ibid.*, No. 19.
- 29) *Ibid.*, No. 53.
- 30) *Posthumously Published Poems*, No. 113.
- 31) Daniel G. Hoffman, *op. cit.*, p. 94.
- 32) *The Black Riders*, No. 51.

